

【パネルディスカッション】

高知人文社会科学会第6回公開シンポジウム 有機農業・提携と食のローカライゼーションー南国高知の事例を中心に

パネリスト

丸井 一郎（高知大学名誉教授・NPO法人土といのち理事長）

山本 優作（NPO法人高知県有機農業研究会理事・夢産地とさやま開発公社前代表理事・高知県有機農業研究会前事務局長）

田邊 佳香（高知県立大学学生・高知県高等学校元教諭）

佐藤 亮子（愛媛大学法文学部准教授）

コーディネーター

岩佐 和幸（高知大学人文社会科学部教授）

《発表：丸井一郎》

○岩佐 後半はパネルディスカッションです。まず、3人のパネリストから、1人15分ずつお話いただき、その後ディスカッションに移っていききたいと思います。

まず、最初に、丸井一郎さんからお願いしたいと思います。丸井先生は、高知大学在職中は人文学部国際社会コミュニケーション学科に所属され、現在は名誉教授です。ご専門は、異文化間コミュニケーション論や日独比較でして、『言語相互行為の理論のためにー当たり前の分析ー』（三元社、2006年）をはじめ、著書は多数に上ります。

また、丸井先生は、ドイツでの豊富な研究滞在経験を背景に、言語のみならず飲食文化を含む相互行為とそれを取り巻く生活世界にも視野を拡げてられました。その代表例が、ヨーロッパのスローフード・スローシティの研究です。こちらについては、本日皆さんのお手元に『スローフードをはぐくむドイツのスローシティ』（南の風社、2006年）が配られていると思いますが、そちらで詳しくご覧いただけます。

さらに、先生は、こうした教育研究の一環として、エコロジーをはじめ社会運動にも精神的に取り組んで来られました。現在は、NPO法人土といのちの理事長として活躍されています。

今日は、そうしたヨーロッパのスロー運動などの詳しい話がうかがえると思います。

高知人文社会科学研究第6号(2019)

それでは、丸井先生、よろしく願いいたします。

○丸井 こんにちは、皆さん。ものすごくたくさんの内容を一度にしゃべらないといけませんので、頭の中がジェットコースターになると思いますが、あんまりびっくりしないでください。

最初に3秒だけご紹介します。先ほどから話が出ていましたが、1977年に創設された高知土と生命を守る会、現在のNPO法人士といのちが、今年創立40周年を迎えましたので、この度本が出版されました(『土といのち-南国高知発・有機でつながる食と農』(土といのち、2017年))。会場を出たところで売っていますので、ぜひ手にとって、面白そうだったら買ってください。

もう1つ、これはもう10年以上前に私が書いた一般書です。学術的には価値がありません。これを無料で進呈します。というのは、スローフードとスローシティに関する記述は、こちらを見ていただきたいからです。ここではかなり端折ってすっ飛ばして話を進めていきます。この本が出た後の最近の傾向についてだけ、今日は紹介します。もうデータが古いので、絶版にしようと思っていましたので、本はタダで差し上げます。こちらも会場の外にありますので、持って行ってください。では、前に急ぎます。

先ほどの「地域化」ということにつながりについてです。私は、もともとはコミュニケーション理論が専門ですが、コミュニケーション理論をやっていると、飲んだり食ったり騒いだり、「飲みコミュニケーション」のほうにも当然広がっていくわけですね。もう1つは、ドイツで研究滞した時に、日本にはヨーロッパの日常の食生活のことがほとんど伝わっていないことに気がつきました。1979年のことです。それ以降、徹底的に飲食生態について調べるといことを、セカンドビジネスにしています。たまたまヨーロッパでも1970年代から、単なる飲食、農学、社会史、歴史学ではなく、記号まで含んだ、トータルとしての飲食生態についての理論ができ始めるようになりました。1980年代に進展して、90年代に1つの分野として確立したということで、フランスのフランドラン、イタリアのモンタナリー、ドイツのバルレジウスなどが有名です。あと、英語文献では、メネルやハウツプロムなど社会学者たちが活躍しています。

全球化時代の飲食の問題は、先ほど岩佐先生が言ったので、飛ばします。毒入り餃子だの、黴びないパンだの、利便性は質を減らすというようなことです。

そこで、当面の傾向と対策についてです。「共にづくり、維持する生活世界」。つまり、政府は当てにせず、仲間をつくる。生活の場の自立を目指すということです。最初に結論的なことを言っておきますが、それに相応しい生活形式を形成し、擁護し、発展させるわけです。「共に楽しむこと」それ自体が文化であって、違いがわかるセンスが必要で

ある。それが、スロー運動ということになります。

こうして、イタリアではスローフード運動が始まります。同じような概念は、例えば今のアメリカのCSAや、韓国でも「身土不二」という風に言うそうです。要するに、地域の持続可能性に根差した食のローカル化ということが、一般的に言われています。

スローフード運動については、先に紹介した本を見てください。1986年、チェルノブイリの年にイタリアで、ローマの真ん中にマクドができるというので、文化人たちが反対して騒ぎましたが、「別に禁止することはできない」ということで、とうとう出来てしまいました。そのあたりから、当時イタリアではすでに形成されていた美食運動みたいな動きがありまして、そういうのが合わさる形でスローフードが始まります。ポイントの1つは、グローバル化に起因する画一性の蔓延に対抗する、異文化の外圧への抵抗という側面です。ただ、イタリアの人は商売上手です。つまり、後でちらっと言いますが、いろんな認定があるんですね。それが公正に行われているかどうかは、いろいろ批判はありますが。結局、今の結論として、グローバル化に対抗するということも無論あるけれども、批判的な論点としては「うまいこと乗っちゃった」という側面も強いと言われています。

それから、もう1つのポイントは、日本ではほとんど論議されないことですが、欧州統合で逆に国民国家の垣根が低くなった分だけ、今度は地域の(リージョナル)、語源でいうと、レギオ(regio)の特性や、伝承されてきた生活形式を肯定的に評価する側面、積極的な自己同一性の確認という側面が非常に強いことです。これは、イタリアだけでなく、ドイツでもフランスでもそうです。フランスは、地方自治改革などがうまくいって、村がそのまま残るといった、日本とは少し違う道を歩むことになります。

イタリアでの理解によると、スローフード運動とは政治的な運動であると思われています。この点が、日本ではあまり伝わっていません。つまり、自己決定への政治的動機、「自分たちのことは自分たちでやる」という面が非常に強いわけですね。それには、イタリアにはしっかりした歴史的背景がありまして、19世紀以来、労働運動の中に余暇と文化のサークルがあったのがその背景です。末端でチルコロ・レクレアティーヴォ(余暇サークル)、あるいは「人民の家」、包括的にはイタリア余暇・文化協会(ARCI)となります。そういう歴史的背景があり、それが現代化された形で、一方で環境保護運動になり、他方でスローフード運動になったわけで、かなり政治的な背景があるということを、しっかり押さえておく必要があると思います。

スローフード協会のウェブサイトには、次のことが書いてあります。「ファストライフ(あわただしい生活)は、ファストフードを食べるように強制する。これに対抗する

ためには……。」対抗という意識が非常に強いです。「生産第一のもとにファストライフは私たちの生き方を変える」と言っています。環境と景観を脅かしているというわけです。要するに、佐藤先生の話に出ていた「リローカライゼーション」というのも、こういうところから出てくるということです。「スローフード運動は何か」については、本に書いてありますので省きます。概要ですが、去年のデータによると、160カ国の中で100万人の支持者と10万人の会員がいて、3,800の産品が「味の箱船」に登録され、ちゃんとした伝統的なものであると認定されています。2,400団体が、「母なる大地の会」という生産者、研究者、活動家集団が集う学会のようなものですが、そこに加入しています。他にもアフリカや、メディア、南北問題に関しても、やはり意識があるわけです。あるいは、そういう批判を受けたわけですね。「お前たちだけいいものを食べて」と。それに対抗して、最初は1,000の菜園をアフリカにつくる運動を始めました。あっという間に2,000を超えましたので、今は1万農場を目標にアフリカに菜園をつくるという運動をやっているそうです。

さらに、スローフード運動がそれだけにとどまらず、「スローシティ運動」に拡大したことです。これも、日本ではあまり言われていません。シティは、イタリア語ではcittà (città) ですから、チッタ・スロー (cittaslow) と言いますが、1999年にイタリアで創設されました。これは、はっきり政治的な動機を明らかにしている運動です。そこから、すぐ隣のドイツに運動が飛び火します。2001年に認定されました。単に食べること、伝統的な食材や飲食文化を擁護することだけが問題ではなくて、その基盤である生産体系、生活形式、その母体である都市性の保持と育成を目指すと宣言しています。スローシティは5万人を超えないという基準があります。これは、市長さんたちの体験上、5万人を超えると都市病理現象が起こるからだといいます。「5万人まで」というのは、社会的に根拠があるのかどうか、関係者に聞きました。「そうじゃない。これは経験値だ」と、南西ドイツ・ヴァルトキルヒ市のライビンガー市長が言っていました。都市の問題は、後で触れます。

では、cittaslow (スローシティ) とは、どのようなものか。環境政策やインフラ政策、都市性の質、土着産品、来訪者のもてなし、市民の意識の醸成などが含まれますが、今日は時間がないので飛ばします。ただ、食べ物との関係でいうと、例えば遺伝子組み換え食品を排除する、特産品を保護する、テクノロジーは環境の質を向上するためには使うということなどが挙がっています。他には、スローシティに生きているという自覚。それから味覚教育ですね。若者や学校における味覚教育を導入するという一方で、単に安全な食べ物を食べるだけではなくて、「これがわれわれのアイデンティティだ」という

ところと結びついているのが、少し特異な点だと思います。

現在、30カ国228都市が加盟しています。日本では、気仙沼市と前橋市の北部・赤城地域が認定されています。ただ、スローフードもスローシティも、「やはりディズニールランド化が始まっている」と、ドイツの創設メンバーが指摘していました。なし崩しのなことが起きているようです。別に日本の2つの都市のことを悪く言うわけではなくて、「都市が何であるか」ということに関連でいうと、少し問題があるようです。彼らとしては、「スローな動きが広がれば、それでいいのか」ということなんでしょうね。

最近では、スローフードとの連携で「スローフード・トラベル・リージョン」というものもつくっています。オーストリアとイタリアとの国境にあるケルンテン州のガイルタールなど伝統的なパンなどで有名な過疎地域の谷が、第一号に選ばれました。今年の話です。

調査をやって、いろいろ見てきましたが、生活世界の自己評価ということが非常に重要なポイントだと分かりました。それから、相互行為ネットワークがどれぐらい分厚いかですね。地域内での循環です。これが、さっきのエンベディングということと関係すると思います。third sector（第3の領域）と言いますが、第三セクターというのは日本では政策科学に取られたようで、社会学では仕方がないから「サードセクター」と呼んでいますが、要するに、簡単に言うと「職場と家庭の他に、生きる場所がありますか」ということです。これは非常に重要なポイントで、仲間主義ですね。ヨーロッパは、皆さん個人主義だと言いますが、それは幻想です。日常生活が成り立つには、ローカルな交流世界を形成するしかありません。

登録してあるものもないものもありますが、ドイツ語ではフェライン (Verein)、イタリア語ではチルコロ (circolo) という愛好団体があります。自発・自治・無償を原理とする団体が、非常にたくさんあります。少し古い数字ですが、ドイツの人口8,200万人のうち、2,340万人が自発的な社会活動をしていて、登録フェライン (Verein) というNPOに相当する団体が60万団体あります。日本は4万団体です。単純な人口比で見ると、20対1ぐらいの差です。私が調査しているヴェルトキルヒは、人口2万人に240団体、80数人に1団体です。ヘアスブルックという都市には、1万2,000人に150団体あります。これは登録されているものだけです。登録されていない団体が、その何倍もあります。とにかく「誰もが何かの団体に入ってやっている」という感じです。1に家族、2が地域・コミュニティ。3、4がなくて、5が職場と、そういう感じです。

「都市とは何か」というところで時間がなくなりましたが、人口の多少ではありません。日本は、要するに資本と資材と人口が基準になっていますが、ヨーロッパでは、人

口2,000人でも都市の扱いです。ヴァルトキルヒは2万人。シェーナウという、電力を自給し、さらに売電している有名な町は、2,300人ほどです。それでも都市です。1809年に都市の権利が認定されています。では、どこが違うのかといえば、歴史的な来歴が明確で、交流世界のネットワーク、つまり人と人の交わりのネットワークが非常に多重に存在するということです。ですから、そのために飲み屋がいるわけですね。日本と反対です。飲み屋があるから人が集まるわけではない。人が集まる場所が必要だから飲み屋がある。出来方の順番が違います。全体として社会のコミュニケーション循環があり、飲み屋のテーブルの議論が最終的に世論を動かすといった大きなコミュニケーション循環の形成に関わっています。日本には、これがありません。近代化するとき忘れてしまったわけですね。製鉄所や造船所はつくったけれども、このことがわからなかった。既存の共同性を壊してきたわけですね。

さて、高知地方についてですが、ついになめてたく沖縄を抜いて県民1人当たりの所得が最下位になりました。けれども、「じゃあ、そんな荒れはてて…」という風には見えませんよね。「何か楽しくやってるな」という感じです。いわゆる「限界集落」も増えています。日本の中央集権的な利権システムから特段の便宜を受けてこなかった。しかし、独自の存在感と個性はある。「高知は遅れているのか」と。しかし、これはひっくり返して考えたら、回れ右したらトップです。開発が遅れるということは、破壊が少ない。規模的な意味でも、破壊が少ないということです。各地に居心地の良い隅っこが多いです。都市の過疎と言う言葉があるように、人口が多ければ賑やかで寂しくないかといえば、とんでもない。日本の都市は、非常に寂しい場所です。

高知の潜在力を考える枠組みとして、1つは「生活世界」という概念があります。これは、現象学で使われている概念とは全然別の概念ですので、気にする方のために触れておきます。そして、生活形式が生活世界の中で複数の人たちの間に共有されている。ここが大事です。生活世界の中で他者と共に保持する共同性は、当事者の能力を付与することになります。生活形式実現の十全な主体である可能性を確保します。この度合のことを、私は「生活密度」という概念で表しています。人々が共同性に基礎づけられた行為の当事者である、ありうる度合のことです。テレビを観ている人は、その度合がほとんどゼロに近いです。

自給の意義が、このことに関連で非常に重要になります。娯楽も自給している限りは、生活密度を上げる。垂れ流しのテレビは、生活密度がほとんどゼロです。「長屋の花見」や高知の(本当の)「おきやく」というのは、非常に生活密度が高い。みんなで持ち寄って、調理して、食べて、飲んで騒ぐというのは、まさしく人類のプロトタイプそのもの

です。ペットボトルのお茶を飲むぐらいだったら、自作の山茶を飲む方がはるかにエレガントだと思いませんか。

ただし、生活世界というのは、抽象的な意味合いが強い。具体的な地域と結びつけるために、「生活場」という概念を導入します。これは、生活世界における実践が蓄積されて、それが動機付けになって、屋敷とか、田畑とか、野壺とか、広場とか、飲み屋がそこにある必然性というものが発生します。都市の景観や野山の景観がそういう風に見えるのは、それなりの必然、歴史的・社会的な必然性があります。

生活場としての環境・景観ということを考える必要があります。それは、労働や余暇活動が歴史的に蓄積してきた結果、発生するものです。必然性というのは、都市景観を特徴づけています。だから、広場がなくちゃいけない。「手を入れて出来上がる風景」だから、culture + landscapeで、ドイツ語の概念としては、Kulturlandschaftと言います。この場合culturaは、文化という意味ではありません。手を入れて出来上がる、懇ろに耕すという意味です。

それに対して、「利用空間」というのは、資本制の生産社会が単機能的に利用する資源です。非常に「うとうしい」です。なぜかという、専一の利用法を前提とするからです。意図や意義の解釈がなされ、強制されます。居住空間さえ、利用空間に変わります。要するに資産ですね。利用空間が不本意かつ無制御に拡大すると、生活場の根底的な破壊が起こります。《原発事故→放射能汚染→環境・生活場崩壊》と、こういう風につながるわけです。

歴史的都市空間と利用空間とは、どこが違うのでしょうか。例えば、イタリアの場合、Barは屋根のある広場（piazza）だと言われています。^{いち}市、mercato、Markt、marché、広場、piazza、Platz、place、こういうところが都市の景観をつくっているわけで、日本にはこれに相当するものがあるかないか、考える必要があると思います。日本の都市から生産・流通・消費・廃棄施設を除くと、一体何が残るのか、よく胸に手を当てて考える必要があると思います。

まとめと展望に入ります。まず、生活密度の確保が必要です。テレビの生活では、ほぼゼロです。広い意味での自治、生活場の形成と持続が必要です。日本の近現代の大きな欠損というのは、そういう良き地域としての「スローシティ」ですね、こういうものを形成してこなかったことにあります。人口と資本の集積ではなく、交流ネットワークの分厚さ、中間領域での活発さ、活発な活動、これがあってはじめて都市です。あるいは、都市と言う必要はないです。ヨーロッパは、歴史上、仕方なく城壁で囲んで人々は身を守りました。それをわれわれも真似する必要はまったくない。そうではなくて、「良

き地域」だと考えたらいいわけです。

スローシティというのは、「良き地域」のことであって、地域の中で循環する食べ物、資金、情報、娯楽、こういうものが前提であって、ちゃんとした娯楽、食べ物が地域の中からしか出てこないという地域のことです。高知ならば、今のところ可能です。要するに、「うまいものが喰いたい。ただし、おいしく食べることが、自分やほかの人を傷つけることになる、やっぱりやばい。正しく食べたい」ということです。みんなで食べる方が、うまいに決まっています。先ほど見たとおりです。そのためには、みんなで生きている必要があります。conviviumというのは、スローフード運動の中では「支部」のことですが、conは「共に」、viviumは「生きる」という意味です。これは、中世ヨーロッパでは、騎士が騎士に対して提供する宴会のことです。そうやってみんなで生きて、みんなで楽しむ。そのためには、自覚的に共同組織、仲間をつくりあげないといけないわけです。向こうからやってくるわけじゃない。その組織の簡便な類のことを、イタリア語でcircolo、ドイツ語ではVereinというわけです。ただし、これが絶対的にいいというわけではありません。とんでもなく悪いことをするcircoloやVereinもあります。例えば、外国人排斥のためのフェラインだって、ないわけではない。ここはちょっと眉にツパをつけておく必要があります。

いずれにせよ、こういう生活の根本モチーフを評価し強調することが、われわれの手に食べ物や娯楽を取り戻すという戦略の出発点になればならないと考えています。「土といのち」という団体がそこまで行けたかどうかということに関しては、忸怩たるものがあると言っておきましょう。以上です。

参考資料（抜粋、順不同）

宇田川妙子（2008）：

「イタリアの食をめぐるいくつかの考察 —イタリアの食の人類学序説として—」

国立民族学博物館研究報告33(1): 1-38

横山隆作（1986）：

「イタリアの相互扶助協会（1886年～1910年）」

淑徳大学研究紀要、第20号、69-87

丸井一郎（2010）：

「生活の水準・質・密度：高知で暮らしを考える視座」、

『はじめての越境社会文化論』、243-262、高知大学人文学部、リーブル出版

○岩佐 ありがとうございます。圧縮してしゃべっていただき、どうもありがとうございました。

次に、山本優作さんの報告に移ります。山本さんは、現在、NPO法人高知県有機農業研究会の理事をなさっております。ご自身も有機農家ですが、この間当研究会の事務局長を歴任されまして、高知の有機農家のネットワークづくりに取り組んでこられました。

また、山本さんは、旧土佐山村役場（現在の高知市土佐山地区）で、長年社会教育に従事された他、同地区で長年、食と農を土台とする地域づくりにも取り組んでこられました。代表例が「夢産地とさやま開発公社」で、代表理事をなさっておられました。後ほど、公社に関するご紹介もいただけたと思いますが、「有機の里づくり」という非常にユニークな活動を始め、山本さんは中心的な役割を担ってこられました。

それでは、生産者のお立場からお話させていただきます。では、よろしく願いいたします。

《発表：山本優作》

○山本 ご紹介いただきました、土佐山の山本と申します。よろしく申し上げます。

私は土佐山で生まれて土佐山で育って、現在70歳になりました。ということで、他のことは、あまりわかりません。私は、もともと百姓をやっていたりして、途中でちょっと公務員の道を何年かやりまして、また百姓に戻ったという、人とは少し変わった人間かもしれません。

旧土佐山村は、市町村制が施行された明治22年（1889年）に誕生しまして、それからちょうど100年経ったのが平成元年（1989年）でした。その時、「今までの100年を振り返って、これからの100年をどう生きようか」というのを、地域の人々と話し合いをしたことがあります。当時の人口が1,350人だったと思いますが、その話し合いの場に出たいただいたのが大体750人ぐらいでした。4つの旧校区がありましたが、そこに集まっていたいて、いろんな意見を聞きました。

その時に出た意見が、当時、結構あちこちで設立されておりました第三セクターとして、「そのようなようなものをつくって、地域の活性化をやったらどうか」という提言が出されました。「じゃあ、立村100年の記念事業の一つとしてやろう」ということになり、

たまたま私とその任に当たったわけです。そして、今のとさやま開発公社、当時は、産業開発公社と呼んでいましたが、「公社をつくれ」という命を受けたわけですが、そういう風に名称が変わって設立したのが、平成4年（1992年）です。

その時には、堆肥づくりのための堆肥センター（土づくりセンター）が起工されました。皆さんご存じだと思いますが、堆肥づくりというのは、畜産廃棄物をどうするかという農家側のサイドでつくられるのが普通ですね。ところが、うちの堆肥づくりというのは、畜産がない村でしたから、原料を他から買ったりもらってこなければいけないという中でつくった堆肥づくりでしたので、異例の形ということで、全国的にあちこちから視察も結構たくさん来られました。

うちがセンターをつくった背景は、2つありました。1つは、農業の限界といえますか、行き詰まりがあったわけです。それは、かつてうちの村では、ミョウガの露地栽培をやっていました。それが昭和40年代（1960年代後半）には、1億円に到達するところまでいったわけです。ところが、その時に根茎腐敗病という厄介な病気が発生しまして、農協や村、県と、普及所や農業メーカーに頼んで多大の時間と経費を浪費したのですが、解決には至らなかった。そこで、「もう一度原点に戻って、土づくりから始めたほうがいいんじゃないか」ということから、土づくりセンターをつくりました。

もう1つは、やはり環境面です。それは、土佐山というのは、鏡川の源流にあるということが根本にあったと思います。それはなぜかと言うと、「土が水をきれいにする」ということです。だから、汚染された土の中では、いい水は供給できません。われわれがその水を飲むわけではないですが、下流の高知市民の皆さんが鏡川に注いだ水をダムで溜めて、針木の浄水場から市民の皆さんに提供しています。だから、源流域で農業や化学肥料づけになった農業をしていると、環境を守ることにはつながっていかないのではないかとということです。

実は、うちの村は、長い間、農家に農業に対する補助金を出していました。それも数千万円というお金を出していました。「堆肥センターをつくったら、その間にゼロにもっていこう」と言ったものの、農家の皆さんは既得権を持っていますので、なかなかそこまでいかなかったです。結局、ゼロにするまでに8年かかりました。ですが、最終的にはゼロになりました。それでは、堆肥センターをつくって、土づくりをやったから、今、ミョウガの根茎腐敗病が止まったかといいますと、いまだに止まっていません。止まってはいないけれども、そこにやっぱり意識の変化が出てきたということはあると、私は思っています。

要するに、ただ単に堆肥をつくるだけではなくて、究極の堆肥をつくらないと、そこ

で出てくる糞尿を堆肥にしているわけではないので、耕種農家のための堆肥づくりをしようと思いました。そのことによって、何が変わってきたかという、マスコミがいろいろ取り上げてくれたおかげで、皆さんに知っていただくことになりました。一番最初に、こうち生協の方から「安心で安全な野菜を分けてください。出してください」という要望がありました。私は「堆肥づくりが始まったからといって、すぐにいい野菜はできません」とお断りしましたが、「農家の皆さんが食べて残ったものでいいから、とりえず始めてくれ」ということで、平成4年(1992年)に設立して、秋から試験的に供給を始めて、次の年から契約することになりました。最初は不十分なものだったと思いますが、3年ぐらい経ってから、まともなものがある程度出荷できるようになってきたのかなと思います。

そういう経緯を経て、少しずつ取り組んできました。今、皆さんのお手元に、とさやま開発公社の沿革があると思います。「有機農業への決意表明」は、有機の村宣言・有機宣言をした時ですので、平成9年(1997年)ぐらいだったと思います。だから、開始した平成4年(1992年)からだ、5年ぐらい経ってから、この宣言をしたということになります。現在は、非常に難しいと言われている有機での生姜栽培を手掛けておりまして、いまだにやっぱり病気と虫との戦いをしながらの栽培ですけれども、少しずつ確立できてきているのかなと思っています。

ただ、もう皆さんもご存じのように、全国的な課題ですが、やはり高齢化の波が広がってきていまして、うちのミョウガはともかくとして、今、ユズや四方竹といったいろんな特産品と言われる作物が育ってきてはいるのですが、高齢化でやっぱり放棄農園・耕作放棄地と言われるものがぼつぼつ出始めています。今、つくれなくなった農地を、とさやま開発公社が7haぐらい預かって、すべて有機で栽培をしています。そして、新規就農者がうちを訪ねてくると、その人たちに有機のやり方を教えながら手伝っていたというのが実態です。

そのような中、少しずつですが、交流人口も増えてきていますし、外から移住をしてくる方や新規就農に就かれる方も何人か出てきております。私は、今、現存する私たちの地域の人だけで、自分たちの農地を絶対守っていくことはできないと思っています。そうすると、やはり外の人の力を借りない限り、この地域を守っていくことはできないだろうと思っています。そのためには、住むところも農地も提供して、技術も提供して、一緒になって地域を守っていくことが、日本全国とまで大きなことは言えませんが、せめて高知だけでも安心・安全の農産物を提供していける、そのような地域であっていきたくと思っています。

ただ一つ、いいことがあります。今までは、ユズを栽培しても、大体年14~15回ぐらい農薬を散布していました。急性農薬中毒になって入院された方もおりますし、1名命を落としかけた方もおります。そういう人が、今では農薬を使わなくなったし、高齢化によって、今まで10回農薬をかけていた人が、「もう年に2回しか農薬をかけられなくなった」「まったくやることもできなくなった」ということで、自然に減農薬ではなくて無農薬に変わってきている現実が、本当にあるわけです。それがいいかどうかは別にして、私は歓迎をしたいと思っています。ただ、その時に、無農薬でもできるやり方というのを、われわれが技術的なものを確立していると、それを教えてやっていくことも可能ではないかと思っています。

高知県では、有機農産物の生産面積あるいは生産量が0.2~0.3%と言われています。私は、高知県有機農業研究会に関わっていて、「県下の有機農業の実態を調査しよう」と、県内をいろいろ回っています。今は後で紹介する「オーガニックフェスタ」の関係で止まっていますが、今まで調べてきた印象では、面積はずっと増えていくと私は思っています。今でもすでにかなりの面積があると確信しています、0.5%よりもっと高い、1%ははるかに超えるのではないかと思っています。ただ、全国的に見るとそうではないといわれているのは、家庭菜園などをまったく省いているからですね。

土佐山でうちの公社に出荷してくれている農家は100戸ぐらいありますが、みんなが完全に有機というわけではありません。100%有機の人もおりますけれども、そうではない人もいますね。ただ、「この作物にはどうしても農薬を使わないかん」という人もおりますが、そうではないものはすべて有機でつくっている方もおりますので、そうなる面積はもっともって増えてくるだろうと思っていますし、もっともってやっていきたいと思っています。

今、有機農研自体は、7団体が加盟しています。もちろん、「土といのち」の皆さん方も団体に入っています。個人では、大体26件、会費をいただいているのは32件ぐらいです。それぐらいですので、もっともって広げていきたいと思っています。

皆さんのお手元にあると思いますが、今度の12月17日に「オーガニックフェスタ」が開催されます。今年で2回目です。去年12月18日の日曜日に初めて開催しましたが、大体1,000人ぐらいの人においでいただきました。今年も、高知県と高知市の両方に共催団体になっていただいて、着々と準備を進めているところですので、ぜひ皆さんもお知り合いの方に声を掛けておいでいただけると、大変ありがたいと思っています。

また、後ほど時間があれば、いろいろ話をしたいと思いますが、限られた時間ですので、これで終わらせていただきます。ありがとうございました（拍手）。

○岩佐 どうもありがとうございました。山本さんには、土作りから有機の村づくりへの展開を中心に、有機農業の拡がりについて、大変興味深いお話を紹介いただきました。では最後のパネリストとして、田邊佳香さんにお話をお願いしたいと思います。田邊さんは、現在、高知県立大学看護学部の4年生です。以前は、高知県立高等学校の英語の先生をされていましたが、助産師を志されまして、県立大学に再入学された経歴の持ち主です。今後は大学院に進学予定ということで、ご自身によると「人と社会の健康について勉強中」とおっしゃっています。

今日は、食べ物を食べる消費者代表ということで、なぜ高校の先生から大学に入り直し、助産師を志すようになったのか、そのあたりの思いをお話いただけるとと思います。それでは、田邊さん、よろしくお願いたします。

《発表：田邊佳香「子産み・子育てと食と農—ともにいのちをつなぐ使命—」》

○田邊 皆様、こんにちは。初めましての方も、初めましてでない方もいらっしゃると思いつながりながら、挨拶させていただきました。田邊佳香と申します。今日は消費者という立場から、お話をさせていただきます。

今、佐藤先生から始まって、丸井先生、そして山本さんとお話をうかがいながら、「ああ、いろんなものがつながっているな」というのを感じていました。実は、私は、山本さんのお話にありました、とさやま開発公社や有機農業をされている土佐山地区の出身で、「ああ、なるほど。私が小学校のころに立村100年と言っていたな。その頃にそういう動きがあったから、たぶん今日私がここに立つようになったんだな」ということを思いました。その意味では、まさに何というか、「環境・土がいのちをつくるというところが体現しているのが、(意識はしてないですが)多分私なんだろうな」と思いました。

では、お話を始めさせていただきたいと思います。15分話して大丈夫ですか、岩佐先生(笑)。頑張って早く話します。

タイトルを「子産み・子育てと食と農—ともにいのちをつなぐ使命—」とつけさせていただきました。「大きく出たな」という感じかなと思いますが、中身は拙いものになるかもしれません。一母親、一消費者として、日々の生活の中で食や農についてどう思っているのか、その先に何があるのかということをお話させていただきたいと思います。

消し忘れてメモがずっと残っているんですけども、「忘れたらいけない。これを話

すんだ」と思ってスライドにメモして消すのを忘れてしまいました(笑)。岩佐先生から「田邊さんには、学校の先生から助産師めざして学生になられた経緯や、健康な食と農への思いについて自由にお話してください」ということで、ご依頼をいただいていた。

最初に「私の願い」なのですが、「子育てと食と農に、人間らしく、いのちをつないでいく生き方の文化をつくる手がかりがあるんじゃないか」ということを、今日、高知人文社会科学会に来られた皆さんと一緒に考えられたらいいな、と思っています。私も答えは知らなくて、ぜひお知恵を借りたいと思っています。

さて、お話の流れですが、まず「3.11」まで自分が何をしていたか、3.11を通して出会った人たちと何があったかについてお話しします。次に、今、自分がどのように子育てをしているのかについて紹介します。つまり、生産者／消費者ということであれば、マーケットということになるのかもしれないですけども、私たちのニーズが何なのかということをお伝えしていきます。それから、「じゃあ、私は買うだけの消費者ではなくて、生活者としてどういうメッセージを伝えたいと思いながら、日々暮らしているか」といった、生活者としての意思表示について述べます。最後に、農と子育ての共通点といえますか、私が今、在籍している学部とも関係がありますが、倫理・看護的なもの・ケアの心とつながるものがあるのではないかと、いう順で、お話を進めていきたいと思っています。

「3.11まで何をしていたか」ですが、東日本大震災から丸6年が経ちました。それ以前に私が生きてきた時間は、3.11以後の5倍以上ありましたが、この6年間の重みが大きすぎて、今日、15分の中で言うことはほとんどありません。言うとすれば、東日本大震災が起こった2011年の3月11日に、私は妊娠5カ月でしたということと、職業としては県立高校の教員をしていましたという、たった二言で終わってしまいます。

そして、3.11があって、それ以降の暮らしを通して出会った人たちに教えられたことが、たくさんあります。今日も応援に来てくれているのですが、この友人というか同志の生き方を見てきたことが、私の生き方の選択にすごく大きく関わってきたと思っています。それはどういう態度・行動だったかということ、本当に一言「いのちを守る」ということです。「何を差し置いてもいのちを守る」という、その行動ですよ。子どもたちのいのちを守るために動いてきた、母子避難とか、自力避難とか、自主避難とかいわれる形で高知へやってきた人たちとの出会いが大きかったです。

「何で安定した公務員の仕事を辞めて、助産師になりたいのか」ということをよく聞かれますが、本当に自分でも説明がつかなくて、やむにやまれずというか、もう何か「そっちの方向しかないんじゃないの？」という思いといいますか、直感だけがありました。「じゃあ、そのために何かできるんだろう」ということを、私のこの40年近く生きてきた

すべてを総合して考えたときに、助産師というところにたどり着いたように思っています。

助産師の仕事の魅力については、第一子を出産していたので、伴侶とも「助産師の仕事は素敵な仕事やね」という話はしていたんですが、震災後、「もうどうしてもなる、ならざるをえない」と思い切って伴侶に話をしたところ、「はあ？」って、宇宙人扱いでした(笑)。両親はどうだったかという、大反対で、特に母は、私がこれからなろうとしている看護職に就いていたので、「絶対駄目。あんた、向いてないし」と言って、すごく反対していました(笑)。「子どもはどうなるが？ 生活はどうなるが？ あんた、18歳も年上の旦那さんとおって、何年一人で働かないかんが」みたいな感じで、本当に、「ああ、わかる。わかる。私もそう思うけど、でも、でもね、やらざるをえん。学校に戻って教壇で何か教えているという自分は想像できない」というところまでいっていたので、もうそれを曲げることはできなかったんですね。そしたら、というか、反対は変わらなかったのですが、母は私の母なので、「もうあんたは本当に、反対してもかえって燃え上がるから反対するのはやめる。がんばれー、がんばれー、がんばれー、がんばれー」って、本当に心のこもっていないエールを送ってくれていました(笑)。「おそらく伴侶との18歳の年の差婚をしたときに大反対したことがまったく無益だったということを学習して、それが生かされてたんだらうな。伴侶と18歳の年の差を超えて結婚をしておいてよかったな。自分のやりたいことがやれる」と思いました。

さて、震災後の話ですが、この写真、いいですね。今日いちばんみてもらいたいのです(写真1)。著作権、撮影した方には許可をいただいております。この写真、私にとって、すごく大事な写真です。撮影したのは、右の下のほうに書いていますが、亀山



Photo by Nonoko Kameyama
<http://kodomozenoku.com/1m5vcampaign/card.html>

写真1 母子の写真

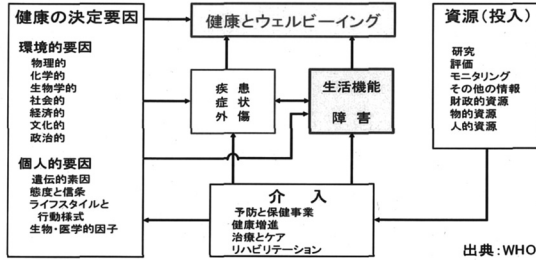
ののこさんというフォトグラファーの方です。今、福岡県に住まわれています。前は東京にいらっしゃいました。東日本大震災があって、移住をされた方です。高知に移住をしてきてくれた友人を通して、私はこの方を知りました。この写真のこの赤ちゃんと、このお母さん。このまっすぐな目で見詰められたら「どうしよう。私はこの先どうやって生きていったらいいんだろう」というのが、すごく問われる目をしていると思います。

ここに、「すこやかに育ってね 願いはそれだけ」というメッセージの一文がありますが、本当に素敵ですよ。もう一回言いましょうか。「すこやかに育ってね 願いはそれだけ」。もう本当に、「勉強ができる子に育ってね」とか、「お金を稼げる子に育ってね」とか、「社会の役に立ってね」などは一切なく、「健康で、そこに生きてあるだけで、それだけでいい」というメッセージで、私はすごく共感しました。

これは多分、私が生きてきた中で、例えば治らない認知症の母の介護をずっとしてきたことであるとか、障害や疾病が治らない状態の家族員がいるという中で暮らしてきて、その家族ができないことがあるからどうかといっても、そういうことは全然関係ないということです。むしろ、「もっとすごくいいものをもっているのに、そういうことを苦にして、その輝いているものに蓋をするようにはなって欲しくない。本当に、生きてくれているだけでいいよ」と思っているところがあったので、すごく共感したのかなと思います。

「すこやかに育ってね 願いはそれだけ」。3回も言ってしまいましたが、私、毎日これを見えるところにおいています。すごく好きなんです。「すこやか」ということは、健康ということだと思います。「じゃあ、健康って何か」というと、何かモヤッとしていて言えないのですが、WHOの定義ではこういう定義になっています。「健康とは、病気ではないとか、虚弱でないとかいうことではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあることをいいます。」すべてが満たされた状態というのを、well-beingといっています。beingというのは、いる・あるという存在を表す動詞です。wellというのは、何かうまくいったときにvery wellと褒めてもらったりするように、「質が良い」という意味です。質が良い状態の存在であること。何かわかるような、わからんような定義ですが、これが、今、WHOで定義されている健康の定義です（図1）。

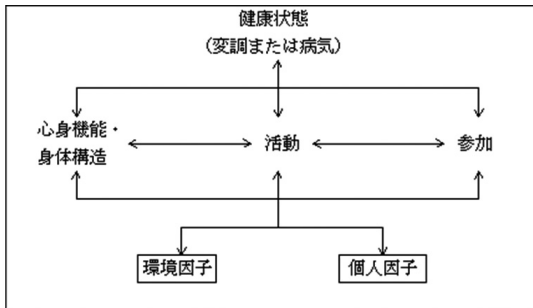
同じ、この文章の中には、こういうものもあります。「健康は人権であり、平和と安全を達成するための基礎である。あらゆる人々にとっての基本的な人権のひとつで、平和と安全を達成するための基礎である。健康があって初めてそれらが達成されていく。」健康がまさに土壌であるといわれています。



大川弥生「ICFの概念枠組み－「生きることの全体像」についての「共通言語」－」第1回社会保険
審議会統計分科会生活機能分類専門委員会、2006年7月26日
(<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000002ksqi-att/2r9852000002ksws.pdf>)。

図1 健康に関する概念枠組み

さて、この図は、「生活機能モデル」という名前がついています。2001年に出されたもの
のです(図2)。この「生活機能モデル」とは何かというと、心身機能の不自由を生活の
活動を補うことで豊かな人生に参加できるようにするというのをこの図式が示してい
ます。それ以前は「疾病モデル」といって、簡単に言えば、例えば、交通事故で頸
椎損傷になって、体が四肢マヒになって、動かなくなって、車椅子になったら、「それは
それでも可哀想やね」という考え方、あるいは「それはその人の体がそうってしまった
から、どうしようもない」という考え方です。それに対して、「生活機能モデル」は、
「心身機能・身体機能」「活動」「参加」の3つがキーワードになります。体のこと・心
のこと、仕事・家事・生活行為、そして社会的役割というこの3つを「生活機能」と言
います。



出所：厚生労働省「国際生活機能分類－国際障害分類改訂版－」（日本語版）の厚生
労働省ホームページ掲載について」2002年
(<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2002/08/h0805-1.html>)。

図2 生活機能モデル

丸井先生のお話でも、「生活場」や「生活」という言葉がたくさん出てきました。Quality of Lifeと言いますが、「生活の質」「人生の質」を上げていくということで、例えば個人因子として、体が動かないということがあっても、それを補うために車椅子という物的なものをととのえたり、バリアフリーにして段差をなくすことで、社会参加につながっていくのではないかと。ということは、むしろこれは私たちの社会の問題なのであって、個人因子が問題になる社会のほうが問題なのではないかということを提言しているモデルだと捉えています。そのことが、どういう風に私たちが生きていけるかということのヒントになっているのではないかと思います。

この図、色がきれいですよね。きれいなので、好きです。Sustainable Development Goals (SDGs) と言われているものですが、この隅に小さい字で「持続可能な開発目標」という17個の目標が書かれています(図3)。「貧困をなくそう」「すべての人に健康と福祉を」「海を守ろう」「陸を守ろう」など、いろいろありますが、これらを統合的に考えていこうという考え方が、さきほどの生活機能モデルと近いものがあるのではないかと、私は考えています。なぜ、これらがこのように全部いっぺんにパンと出てきているかというと、これらはすべてつながっているという考え方が、背景にあるからです。

看護の世界にも、そういう考え方があって、「コミュニティ・アズ・パートナー・モデル」(community as partner model) というものがあります。これは、中心にコアシステムというものがあって、そこに人がいます。パーソン・センタード (person-centered) です。人間が真ん中において、いのちが真ん中にある、それを支えるサブシステムとして、図にすると物理的環境、経済、政治・行政、教育、交通・安全、コミュニケーション、レクリエーション、保健医療・福祉というもの放射線状に囲んでいるような状態



出所：国際連合広報センターホームページ
 (http://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/sdgs_logo/)。

図3 国連持続可能な開発目標

を表しているのですが、そういうものによって私たちの生活・人生の質が支えられている。だから、何か一つだけではなくて、すべてを目配りしていかないといけないという考え方です。

つづいて、2017年の子育てにおいて、私たちがどんなニーズを持っているかという話をします。子育ての現実というか、健康を守る人がどんな状況に置かれているかという観点で、私たち以前の世代の子育てと2017年の今の子育てとを比較してみます。出しますよ…ドーン。私たち以前の世代の子育ての皆さん、すみません。こんなに簡単にしてしまいました(笑)。「ときどき食事を与える。」私はこんな風にして育てられました。ときどき食事を与えられたら、それでまあまあ生きていけるというものです。それはなぜかということ、地域に力があつたからです。近所の人がいたり、父母が仕事に行っている、支えてくれる誰かがいたからです。

では、2017年の子育てはどうかというと、すべて読むのがちょっと嫌なくらいたくさんありますが……「留意すべきことは、子どもが学業的にも、感情的にも、心理学的にも、精神医学的にも、スピリチュアルにも、身体的にも、栄養学的にも、社会的にも、ニーズが満たされ、励ましすぎたり逆に励まし足りなかったりせず、また、不適切に投薬されたり、テレビやゲームやネット漬けにならず、加工食品や遺伝子組み換えや放射性物質やプラスチックも取り込まないよう、そして健康体で社会問題に意識を高め、平等主義と同時に権威をもつように養育しながらかつ自立性も伸ばし、優しくしかし放任主義的になりすぎず、静かで落ち着いた環境にシックハウスにならないような農薬を使用しない建材を使った二階建ての庭付きの家で2.07人以上のきょうだいを持ち外国語が話せる環境にあるようにすること。」こういう感じのことを、私たちは求められているんですね。私は今、子どもが2人、幼稚園児と小学生がいますが、「私も学業があるし、やれと言われても……」というのが現状です。

でも、昔は食事を与えられているだけで育っていたのが、今、これだけ必要なわけですか。これは、子どもに問題があるわけではないし、親に問題があるわけでもないし、これは社会の問題なんじゃないかな、と思います。それが、さきほどの生活機能モデルのところをいうと、個人因子以外の環境因子や社会参加の問題というところにつながってくるように思います。

次に、わたしたちの食生活のお話をします。この写真は衝撃的、長いゆで卵です(写真2)。2004年に西日本新聞の『食卓の向こう側』という連載で取り上げられていたものですが、「フェイク食品」と表現されるものです。業務用ピザや生野菜サラダ、スーパーなどで売ってるものに使われる、同じようにきれいに黄身が真ん中にきて白身があると

いうものです。普通のゆで卵だったら、切っていくと端っこは白身だけになるんですよ。そういうのがないように、見栄えがいいようにつくられたものです。見栄えがいいものを消費者が買うからということで、こういうものがつくられています。

そのような日常の中で、私は、毎日が投票日だと思っています。この資料は、イギリスのEthical Consumerという団体のホームページから、ちょっとお借りしてきたものです(図4)。佐藤先生のお話にも出てきましたが、動物愛護の話であるとか、北大西洋版のTPPみたいなものへの懸念であるとか、公正な労働か、とか出ています。これは「誰があなたのシャツを

つくってますか」と書かれています。労働者の権利。そして、ここに書いてあるのは、動物愛護ですね。「動物実験をしていません」ということが書かれています。これは、BOYCOTT amazonと書いてありますが、「租税回避をしているような地域貢献しない会社にはお金を落とさないようにしましょう」ということです。そういう風に思いながら、毎日を過ごしています。

次は「農と子育てのコツ」ということで、これが私はケアの倫理につながっているのではないかなと思っています(図5)。岩佐先生の最初のお話に福岡正信さんの『わら一本の革命』のお話が出てきていましたが、耕さない、肥料も化学農薬もやらない、何もしない、寝ている時間が長いのが一番いい、寝ているために、何もしないためにどれだけ土を良くするかとかいうことをずっと活動してこられたということが書かれていま



出所：西日本新聞社ホームページ
(http://www.nishinippon.co.jp/nnp/lifestyle/shoku/rensai/post_18.shtml)。

写真2 長いゆでたまご



Ethical Consumerホームページ
(<http://www.ethicalconsumer.org/aboutus/ourmission.aspx>)。

図4 毎日が投票日



出所：日本看護協会ホームページ
(https://www.nurse.or.jp/nursing/practice/rinri/text/basic/what_is/index.html)

図5 子育てと農の倫理

す。簡単な知識しかないですが、それは子育てしていてもすぐ通じるものがあるなと思います。「良く育てたい」と思って、ついついいろんな口出し、手出し、いろんなことを言いまくってしまいそうになるのを、ぐっと堪えて本人に任せる。とはいっても、放置ではなくて、環境をととのえ、本人が選ぶ、自己決定を尊重することを大事にする、自分で育つ力・自分が本来持っている力を伸ばすということが大事ではないかなと思います。

今度は、ケアにおける4つの倫理原則について紹介します。私たち、今、国家試験を控えていまして、4回生なので次のような語呂合わせで覚えているところです。「セイゼンのムキムキソソチヨウを守る。」「生前(善)の無危害……、ムキムキ、尊重を守る」のように覚えているところです。まず1つ目が、「自律尊重」。本人がしたいと思うこと、本人の決定を尊重しましょうということです。第2に、「善行」。その人にとって、利益になることをしましょうということです。第3に、「無危害」。危害を与えることはしないでおきましょうということです。最後に、「正義」。これは、分配の意味なんですが、資源が公平に行き渡るようにしましょうということです。これが、ケアの中で大事にされている4原則です。

私は、「これを知って良かったな」と思いました。「子育てに役立つな」と思って。子どもとの生活の中ではすぐ忘れてしまいがちですが、できるだけ気にしていきたいと思っています。

「おわりに」に入ります。私の子どもは、6歳と10歳。私は、もうすぐ40歳です。この世界の片隅に、ひとつのいのち・ひとつのクズとして生きて、ただかか40年でも本当にいろいろありました。それでも思うのは、生きていくのは大変です。おかあさん10年生にやっとなりました。農業も子育ても、育つのを待つのも大変です。育てたいなと思って、畑に生えている草を引っぱっても、引っこ抜けるだけで全然育たないですよ。そういうのと似ていると思います。子どもも、引っぱっても伸びませんし、「こうし

ろ、ああしろ」と言っても、絶対そういう風にはならないな、というのを日々実感しています。

NPO法人土といのち、それから、とさやま開発公社、それからこちらの高知人文社会科学会、ご参加の皆様が今日まで来られた日々というのを考えたら、「大変いろんなことがあったんだろうな。それは15分じゃあ、話し切れないよね」というのを思いながら聞いていました。

木村資生さんという生物学者によると、生命誕生の確率は、一億円の宝くじが100回…100万回だったか、連続で当たるのと同じぐらいの確率だそうです。そうやって生まれてきたいのちを活かし、いのちを喜ぶ生活をしていくために、この環境や土づくりというのを大事にしていきたいと思っています。

今日、SDGsの話を出しましたが、持続可能な開発のための教育（ESD）というもあります。これは、私よりも専門家の方がおられると思いますが、「教育や生涯学習を通して、われわれは、経済や社会的公正に基づいた生活様式や、食糧安全保障、生態系の健全性、持続可能な生活、あらゆる生命に対する尊重、そして社会的連帯感や民主主義、集団による行動を育む力強い価値観を獲得することができる。ジェンダーの公正、特に女性や女兒の教育への参画は、開発と持続可能性を実現する上で極めて重要である」ということを、文部科学省でも言っています。これ、国連から出てきたものなんです。

今日こういう機会を持たせていただいたこと、本当にありがたいと思います。また、これからもお知恵を貸していただけたらと思いますので、よろしく願います。ありがとうございました（拍手）。

○岩佐 田邊さん、ありがとうございました。ご自身の熱い思いとそれを支える理論について、いっぱい述べていただきまして、ありがとうございました。

* * *

〈ディスカッション〉

○岩佐 それでは、ディスカッションに入りたいと思います。フロアの皆さんから、質問が5つ来ておりますので、まずそちらについて、パネリストの方々にお答えいただきたいと思います。

最初に佐藤先生に3つ、質問が来ておりますので、こちらから紹介いたします。

まず、イコールラボの玄番隆行さんからのご質問です。「合衆国のファーマーズマーケットで、卵の生産はどの程度の規模でしょうか。抗生物質や鳥の数、オーダー等について。あるいは、餌のローカル度について、少しわかれば、教えていただきたい」という質問です。

2つ目は、玄番真紀子さんからです。質問は、「学生さんの時代から有機農産物や地域、地元産の野菜に関心を持つことは、とても大切なことだと思い、ゼミの内容としてもとても有意義だと思いました。ただ以前、都市部の学生さんたちは経済的理由もあり、アルバイトなどで自分たちの食べる食事にはさほどお金も時間も割けず、コンビニなどの弁当で済ませている現状だとよく耳にしました。地方の大学についての状況は、どのような感じでしょうか。学食での食材には、どのくらいの率でローカルフードが取り入れられ、それについてどのように啓蒙などされていますか」という内容です。愛媛大学については佐藤先生に、高知大学のケースについては、丸井先生でしょうか。

○丸井 私も現役でないからね。現役の人が答えてください。

○岩佐 そうですね。では、私からとお答えさせていただきます。

3つ目は、環境の杜こうちの谷川徹さんからです。2つ出していただきました。一つ目が「合衆国のローカルフード運動ができた、あるいは進んだ社会的背景について、教えてください」という質問です。それから、2つ目は「同上の動きでの生態系への、あるいは環境インパクトへのコメントについて」という質問が来ています。以上3つについて、まずは佐藤先生からリプライをお願いしたいと思います。

○佐藤 はい。なかなか難しい問題をいただいたようです。

まず、ファーマーズマーケットでの卵の生産状況についてですが、正直言うと、卵はとても難しいですね。生活の中での必需品なので、ファーマーズマーケットは卵農家を確保したいと思っはいるのですが、実際に卵農家さんを入れるのがとても難しい。その背景にあるのは、ちょっと私も不勉強で確たることが申し上げられず、申し訳ないですが、やはり今、卵がものすごく工業化されている分野で、小さい農家で卵を堅実に生産して農業として生き残ってられる農家がそれほどいないのではないかと想像しています。それにプラスして、そこで健康な餌を与える環境の中で卵農家が存続していくのが厳しい状況というのがあるように思います。実際にどれくらいの規模かについては、それぞれあるとは思いますが、具体的な数字は、今のところ私も持っていないので、

ぜひ次の調査の時に調べてみたいと思います。

いずれにしても、どのファーマーズマーケットも、エッグファーマーを探すのがとても重要だと思っているけれども、なかなか難しいというのが現実ではないかと思います。

2つ目の「学生の取り組みとその現実の食行動」についてのご質問ですが、おっしゃるとおりですね。愛媛大学の学生さんたちは、やっぱりあんまり経済的には豊かではないところがあるので、全員アルバイトをしています。アルバイトをしていて、その中であのような（ファーマーズマーケットの運営）活動もしているので、現実的にすごく忙しいですし、コンビニのお弁当を食べたり、ペットボトルのお茶も飲んだりしています。

学生は、「ファーマーズマーケットをやっていなかったら、自分がそういうものを買うときに、何も考えることはなかったと思う」とは言っています。だからといって、100%いいものを食べるようになってるかといえば、それはまた経済的な制約や時間的な問題があって、全然別なんですけれども、少なくとも考えるようになったということはあります。また、農家と直接つながるということで、その食べ物が生産されるというのはどういうことなのかについて、関心を払うようになったという変化はあるようです。

あと、学食については、高知大学の学食はいいですか？ 愛媛大学はそれほどよくなくて、おそらくローカル率などは考えていないように思うのですが、どうでしょう、高知大学は？

○岩佐 高知大学も大体似たような感じですね。四国生協連と一緒に仕入れをしていると思いますので、多分どこも同じような状況だと思います。

ただ1つだけ、実は学生の中に、以前、高知の地域づくりに関心を持った学生がいて、高知県の北部・嶺北の棚田米のお米を学食に使おうという取り組みなどはありました。それは学生の要求で始まったわけで、学生の方でそういうムーブメントが起これば、そのようなことも可能性があるのかもしれないと思います。

○佐藤 そうですね。今、大学は学生コンシャスにすごく敏感になっているので、学生が要望すると、そういうふうに動く可能性はあるのかな、とは思っています。そういう意味では、愛媛大学は、それほど積極的に生協で提供している食を変えていこうということころまではいっておらず、私が担当している学生自身も、まだそういうふうにはなっていませんね。例えば、「ペットボトルのお茶をなるべくやめよう。地域のお茶をつくっている方のお茶を飲もう」というぐらいのことは、授業の中で変わってはきていますが。

あと、3つ目ですね。これも、とても答えるのが難しいですね。特に環境インパクト

に対する調査というのは、やっているところがあるかもしれないですが具体的には情報をもっていません。ただ、言えるのは、ローカルフード・ムーブメントというか、地域食材のシステムについて考える活動は、環境問題に関心がある団体が運営しているケースが少なくないです。しかしファーマーズマーケットをやることによって、どれぐらいインパクトが減ったかというのは、なかなか経済インパクトよりも調査しにくい。経済的な影響調査というのをやっている例は知っていますが、環境インパクトがどれぐらいローカルフードによって削減されているかというデータを、今のところ私は持っていません。ちょっと調べてみようと思います。

ローカルフード・ムーブメントの社会的な背景ですが、これもさきほど少しお話させていただいたように、1960年代前後のヒッピー文化の人たちが、カウンターカルチャーとして、自分たちが住んでいる世の中の流れに対抗する文化として、オーガニックであるとか、そういう農業あるいは食に対する考えを持ったということが、一つはあるとは思いますが、しかしそれと今のローカルフード・ムーブメントというのが、直接的にはつながっていないような気がしています。

どうしてこんなにアメリカ人が、ローカルフードに関心を持つようになったのか。もちろん、全員ではなく、所得的に安定している人が中心ですが、どのようにローカルフードに対して意識が高くなったかについては、ちょっと日本と背景が違うのでは、と思っています。日本の場合は、「国産なら、そこそこいける」といった、国産・ナショナル信奉的なものが日本にはあります。アメリカの場合は、1つの州が何か独立国みたいな位置づけですが、とはいえそれはやはり国ではないですよ。国といえば連邦になるわけですが、農業や食の分野だけをとってみても、ローカルの対抗軸はグローバルになる。例えば、アグリビジネスみたいにもものすごく経済的な財力があって力を持っていて、種から流通まですべて支配しているようなビジネスが一方にあり、そういうところが世界と直結し、いろんな資材を含めて資源を持ち込んだり外に出したりしているという環境の中で、食について考えている人たちがローカルに対抗するものとして出てきたのがグローバルという考え方です。そこから「自分たちのローカリティを守っていかなくちゃいけない」という動きが、根本にはあるのかなと思います。

それに対して、日本でいくらローカルといっても、日本の国そのものがアメリカのあの広い土地の中で考えると、ローカルともいえるようなサイズであり、プラスその流通形態も全国流通のものに対するローカルといったような対抗軸が、やはり日本の場合は成立して、その先にまた輸入というのがある。輸入食品に対するローカルではないですよ、日本のローカルは。確かに、輸入食材に関する危機感みたいなものはもちろんあ

ると思うのですが、「ローカリティ」といったときに、日本の国の中のローカリティという感じになっていくように思います。

全然、お答えになっていなくてすみません。そういう意味で、ローカルフード・ムーブメントというのがこれほど盛り上がったというのは、やはり「グローバリゼーション、グローバル企業、グローバル・アグリカルチャーみたいなどころから、いかに自分たちの生活を守るか」といった危機感のようなものが根底にあるのではないかと考えています。以上です。

○岩佐 どうもありがとうございました。

次に、これは山本さん宛になると思いますが、グリーン市民ネットワーク高知の吉屋正信さんから質問が来ています。「日本の有機農業で使用が許可されている農薬について、遺伝子組み換え食品に使用されているものと同じものが許可されていますが、このようなJAS規格についてどう思われますか」といった質問が来ています。

○山本 JAS規格そのものも非常に抜け穴もあるし、なかなか難しいと思いますが、私自身は、JAS認証を過去6年ぐらい取ってやっています、農薬自体を一切使いませんでした、もしそれが事実とすれば、それはちょっと駄目じゃないかなと、私は思います。だからそれはもう禁止すべきだというふうに思います。以上です。

○岩佐 はい。ありがとうございました。

それでは、あと2つです。これは、皆さん宛に質問が来ていますので、お一方ずつお答えいただきたいと思います。

まず、1つ目が、高知県立大学の宇都宮千穂さんからです。「演者の皆さんのお話に共感しています。私自身も、リエンベディングの必要性を強く感じるところです。その前提で質問です。有機農業を根付かせることやファーマーズマーケットを運営すること、農協を説き伏せたりすることは、とても時間や手間がかかります。また、高齢化や過疎、人手不足は、他地域との連携を不可欠にします。現代社会の生活を続けていくしかない環境で、エンベディングにはタイムラグがあると思います。消費者としてできること、新しく何ができるでしょうか。今までのさまざまな活動や運動を乗り越えて、というところを含めてお願いします」という質問です。

それからもう1つ、皆さん宛に質問が来ています。学校法人やまもも学園の鳥羽将行さんからです。「本日は貴重なお話、ありがとうございました。皆さんの夢、今後のピ

ジョンをお聞かせいただきたいです。よろしく願います」という内容です。

では、丸井さんから願います。

○丸井 田邊さんの話にあったかな。「毎日が投票」という、あの考え方が非常にポイントかと思います。つまり、選ぶわけですよ、毎日。それに一手間かけると、何か生活が回りにくくなるという忙しい人たちの生活というのもわかりますが、毎回、商品を選ぶというのは投票行動だと考えるというのが、1つはありますよね。

それからもう1つは、これは論証のプロセスを全部端折って言いますが、要するに、「大きな会社がつくっているやつはやばい」ということです。自分たちの身の回りにあるものを選ぶ。「顔が見えれば、それでいいのか」という話がさきほどありましたが、顔が見えていれば、その人を問い詰めることができます。「おたくは何をかけていますか。それは良くないんじゃないですか」という問い詰めです。それから、例えば、農協に向かっては、「ネオニコチノイド農薬はやめてくれ。これは、生物生態系を根底的に破壊する可能性があるから」というようなことを、嫌がられても言って回ることです。

自分たちの自己決定権というものは、行使しなければ奪われます。例の有名な「権利は行使しなければ……」というのがありますが、自己決定権も同じです。毎日、自分でお茶を入れる代わりに缶から飲んでいる限りは、確実に何か汚染されている。汚染というのは、何も実質の汚染だけではないですからね。「生活を自分の手にする」という意味で、ますます自分から遠ざかっているという意味です。

皆さんの頭の中にあるイメージで、自分のものではないものがやたらと多くはないですか。マスメディア起源だとか。それをとにかく自分たちの手に取り戻すには、一人でやるよりはやっぱり仲間がいたほうがいいですね。私の話にもあったけれども、とにかく仲間をつくることです。仲間をつくって仲間の間で「あれはやばいよね。これにしよう」というような話ができるように、だんだん、少しずつ持っていく。だから「この商品はいいですよ。この商品は駄目ですよ」というやり方ではないですね。そうではなくて、仲間内で「これ、大丈夫かな。ちょっと心配だね。まあ、食っちゃえ」。その場では食ってしまったとしても、そういう意識がだんだん共有されてくると、少しずつ先が見えてくるのかなという気がしますね。

それからリエンベディングについては、私の話にもありましたが、そうやって自分たちの自己決定権を取り戻すというか、確立するというか、でっ上上げる。言い方は何でもいいですが、ファーマーズマーケットもそうだし、われわれが努力してきたことも、うまくいったかどうかは別として、一部分がそうですが、とにかく自分たちで決めると

ということですね。やっぱりそこでも同じで、その生活自体はやっぱり自分たちがつくり出すということです。誰かがやってくれるわけじゃない。そうすると、「どこで買うか」ということも、例えば、大きな量販店で買うか、それとも個人商店で買うのかということになります。個人商店で買えば「おじさん、これ、どこの？」と聞けるわけです。量販店の店員は、一切そういう知識がありません。「これはどこから来たのか？」というのは、非常に大きな重要な問いだと思います。それがコントロールできている度合というのが、私が言うところの生活密度の度合と関係します。つまり、自分たちが自分たちの生活、食事、娯楽、その他をつくり出していくわけです。子育てもそうですが、そういうことです。

だから、田邊さんの話にあった非常に興味深いことは、昔は子どもに食事を与えていたら、それで済んでいた。なぜかというと、地域があって、何か世話焼きのおばあちゃんが出て、夜、あまりに赤ん坊が泣くので外に出たら、みんなおばあちゃんたちが「ワッ」と寄りついてきて、「私に任せなさい」というような、そういうコミュニティがあったわけですね。

都市の話の続きですけど、日本の大都市ほど、寂しい過疎地はないです。つまり可処分所得があるから、AさんとBさんがたまたま住宅団地の隣に並んでいるだけであって、その人たちがそこに2人で並んでいる必然性というのは何もないです。非常に寂しいところですよ。

そういう意味では、高知というのは、まだこういう言い方をすると、いろんな意味で誤解されるのですが、どう言ったらいいかな……冴えないヨーロッパの田舎とそっくりです。というのは、要するに、自治の意欲ということに関して、非常に面白いことがいろいろとあると思います。だから、勝手に思い込んだ近代化・現代化の実験場としての都市、日本の都市ですね、それから取り残されているように見える過疎地・田舎という意味合いですけれども、どっちが自分たちの手の中に自己決定権を握るという点でやりやすいかというと、うーん、そういう意味で私は選んで高知へ来たわけです。どう言ったらいいかな。単純に70万分の1のほうが1000万分の1よりも価値が高いですよ。それから、身の回りにいる人たちに影響を行使することができるし、相手からこちらもいろいろと支えられるというようなことを考えれば、日本の都市というのは、名前は都市ですが、本当に過疎地ですね。

「ソーシャル」という言葉がさっきから盛んに出てきますが、これ、皆さん、間違っているわけではないですが、イメージがずらい。「ソーシャル」というのは、何も社会ではないです。「人と人の間」という意味です、もともとはラテン語から来ています。

だから、例えば、「母と子どもの社会的関係」というようなことを、よく日本の専門書に書いてありますが、誤りではないにせよ、あまりに明後日のほうを向いていると思います。そうではなくて、ソキエタス (societas) というのは、人と人の間のことなんです。人と人の間のいろんな軋轢もあるだろうし、機微もあるだろうし、それを豊かにするというのが、良き地域をつくり出す一つの出発点ではないかと思っています。ビジョンといえば、そういうことです。

有農産物が増えてくれることは、それはそれ自体としては非常にいいことです。ただし、その基の、そのまた基にどういう考え方があるのかということです。例えば、ヨーロッパ、イタリア人の田舎風に言うと、「人の金儲けのために何で俺がこれをやらされなきゃいけないのか。人の金儲けのために、何で俺がそんなものを買わなくちゃいかなのだ。だったら俺は、近くの隣のルイージのところを買おうよ」というような、そういう何て言うか、もっこす、じょっぱり、いごっそう、わが道をやるのが、これから何か先が見えてくるようなやり方かな、という風に思っています。

○山本 私はビジョンというか、夢というか、それは単純に私たちの地域の中から農薬や化学肥料をすべて排除すること、これができたら、私は素晴らしいなあと思っています。

もう1つ、消費者の皆さんに、お願いがあります。私もいろんなところで、東京から大阪からいろんな消費者と話し合いをしてきましたが、私はいつも、「消費者の方は結構欲張りですよ」という話をしてきました。それは何かというと、「見た目がきれいで、おいしくて、安全で安心なもの。それでいて、安くなければいかん」と。「安心・安全というのは高くつくもんだということを、考えてください」と、私は言ってきたことがあります。だから、いくら高くても、それを買い支えていくということが、やっぱり農家が生き残っていく道にもつながっていくと思うので、そのことも少し加味してやっていただければありがたいと思います。以上です。

○田邊 さっき話すぎたので、短くします。命の価値を考えるとということを、もっと突き詰めていったらいいんじゃないかな、と思っています。例えば、高いから買えないとあって、「体に良くないものが入ってるけど」といいながら食べて、それで例えば病気になるということがあった時に、そこから先の自分の人生がどうなっていくか、医療費がどれぐらいかかるか、ということをとータルで考えると、「高いとって買わないのはもったいないんじゃないかな」という風に思ったりします。

それから、いろんな意見の方がいらっしやるわけですが、自分が「こう思う」という

ことを言ってみる、やってみることによって、その一人ずつが増えていくことで、「ああ、あなたはそう思っているのね。実は私もそう思ってた」という人とつながることができました。例えば、それが原子力発電所の事故の後で、子どもの給食の食材はどこから来てるんだろうということが疑問になった時に、幼稚園に問い合わせると、「ほかのお母さんから、そういう問い合わせがありました」ということがありました。現実はこのことです。「じゃあ、材料がどこから来ているかを書いて、毎月出してもらえませんか」というようなことを言う人が複数いたら、その声を通るといえるか、聞いてもらえるようになります。

みんなが何を思っているのかがわからないから、言わないでおこう。ということで、どんどんみんなの口を塞いでいっているように思います。私は、自分が黙ることで、みんなの口を塞ぐことになると思っているの、自分は本当に知識も足りないけれども、何でも言おうと思っています。何でも言って、自分が間違っていることは教えてもらいたらいと思っています。ですから、何か、言ってみること。やってみることです。そして、間違えても、もう一回やり直していくということの繰り返しができたらいいな、と思います。

○佐藤 すいません。みなさんのご意見に「うん、うん」とうなずいてるうちに質問の内容を忘れちゃったんですけど(笑)。1つは、消費者としてできることということでしたかね。

今のお話にもありましたが、日本の買い物の仕方って、すごく静かなんですよ。無言で買い物する。もちろん、昔はそうではなくて、八百屋のおばちゃんとか、魚屋のおんちゃんとかとしゃべりながら買い物していたと思います。しかし今、スーパーとか、直売所でさえ、あんまり話さなくて、黙って買うようになっていきます。

それが、例えばヨーロッパや(私はあまりヨーロッパのことは詳しくないですが)、あるいはアメリカに行ってみると、消費者の人がおしゃべりなんですよ、良くも悪くも。ですから買い物の時に、何か少しでも、先ほどの田邊さんのお話とも通じますが、何かしゃべってみることです。「これ、どこから来たの?」とか、「大丈夫なの、これ?」とか、お店の人が知らないかもしれないけれども、会話しながら買い物してみるということが、少しずつ変化を生むのではないかと思います。

あともう1つ、過疎化・高齢化が進む中で、そんなに時間がかけられないというお話、すごくよくわかります。でも、すごくひどい言い方ですけども、高齢化している人たちの意識を変えるのはなかなか難しく、どちらかという、やっぱり若い人た

ちを変えていく、あるいは子どもの頃からそういう環境に置いてあげるといことの方が、もしかしたら手っ取り早いのかな、という気がしたりしています。

さっきのネオニコチノイド農薬の話もありましたが、この間、アメリカの田舎に行ったときに、「すごいな」と思ったのは、ハチのような授粉活動をする生き物たちがどんな行動をするのかということ、子どもたちに教える教育をしていたんですね。ネオニコチノイドの話は、今、日本の教育の中で、一生懸命しているという印象が私にはなかったので、「アメリカってすごいな」って正直思った。子どもの時から、若い時から、そういう環境をつくってあげることが、時間がかかるようで、結果的には手っ取り早いのかな、という気がします。

私の今後の展望ですが、今やっているファーマーズマーケットを、これからどうしていこうかと、ちょっと悩んでいます。なぜかという、いつまでもこのままの体力では続かないだろう。肉体だけではなくて、財力の面での体力も続かないだろうということもあります。ただ、「光」だと思っているのは、最初は全然見向きもしてくれず、鼻にもかけない、気にもとめてくれなかった愛媛大学の教員が、最近は、「次も行けたら行きますね」と言ってくれるようになったことです。また、「直売所で買えばいいのに、何でこんなことをしてるんだ。そっこのほうがずっと合理的じゃないか」と言うような先生たちも多分いらっしゃるわけですが、そういう人たちも関心を持ってくれるようになったりしています。

あるいは、実際にファーマーズマーケットに来て、「佐藤先生、こんな高いものをどうして売ってるんですか」と言われた先生がいた。しかし事情がわかると、「あっ、そういう話だったら、もしかしたら高くないかもしれませんね」と言って、農産物を買ってくださり、それがすごくおいしかったという経験をしてくださるということがありました。つまり彼らは、大学の先生ですから、知的でエデュケートドな方たちだとは思いますが、そういう人でさえ説得するのがすごく難しいということです。けれども、隣の一人の先生からちょっとずつ変わっていくと、私が先ほどお話したような地域の中の社会的な関係性と経済というのを埋め込んでいくようなことが少しずつできていくようになります。それには、やっぱり隣の何とか先生の一步を変えることぐらいからやっていくことなのかな、と思っています。以上です。

○岩佐 どうもありがとうございました。

一通り質問に対してお答えをいただきましたが、どなたかお一人、ぜひ質問したいという方がおられましたら、挙手をお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

○会場参加者（3） すみません。徳島の木頭というところで、山村留学をしています。子どもの環境を都市から田舎に持っていくことの可能性を、僕らは1998年からずっとやってきましたが、今おっしゃられたことはすごく感じています。僕らのところは、今、小学生ですが、地元の人らとこの活動を続けています。

そういう可能性も、やっぱり探らざるを得ないかなと思います。僕らがやっていて、卒業生の子らは30歳ぐらいになって、何か自信みたいなものをすごく持つようになるというのが、何となく、データの的にはわからないですけど、そういうのを感じています。

子どもから変わっていかないと。今、確かに大学の先生や大人の高齢者の方といっても、やっぱりこれからはそういう人たちのために環境をもっていってあげるといのが大事ではないかということ、ちょっと今聞かせていただいて、すごく思いました。ありがとうございます。

○岩佐 どうもありがとうございました。最後の佐藤先生の発言に触発されたということだと思います。

最後に、パネリストの方々から、今日のシンポジウムを踏まえて、一言ございましたらお願いします。他の方の報告を聞きながら「自分はこう思った」とか、そういうことで構いませんので、最後に一言ずつお願いします。では田邊さんからお願いします。

○田邊 心の準備ができてなくて、何を言おうかなという感じなんですけど……まず、何かこういうアカデミックな場所で、私のような一市民が発言をさせてもらえるということがすごいな、ということを思います。こういう場が開かれるということと、それからここに来てくださる方がいらっしやる。それに関心を持って行動しようとしている方がいらっしやるということが、力になるなということを思いました。

やっぱりキーワードは、「地域」「生活」だということを、今日は皆さんのお話を聞きながら感じました。ありがとうございました。

○山本 佐藤先生もそうですが、ほかのパネリストの皆さん方から私が知らないいろいろな話をいっぱい聞くことができましたので、大変私自身が勉強になりました。ありがとうございます。

○丸井 細かいことは排除して、山本さんのところの野菜はおいしいです、絶対に。谷

川さんのところの野菜も絶対うまいです。それから、井上正雄さんの野菜もおいしいです。だから、絶対一度食べてみてください。おいしいです。

○佐藤 今日、皆さんのお話をうかがっていて感じたのは、やっぱり全部がつながっているということだと思います。「地域」という言葉一つを取っても、地域の中で起こっていることは全部がつながっていますし、「食」というのも、今回の質疑応答でもあったように、環境ともつながっているし、人口問題ともつながってますし、まちの規模とも密接につながっていると思います。

今回、「ローカライゼーション」がキーワードの一つでしたけれども、やっぱりそこにあるのは、ソーシャルという人間と人間のつながりということを基盤にしたさまざまな問題とか、活動のつながりです。このシンポジウムを通じて、そのつながりが再確認できたのではないかと思います。ありがとうございます。

○岩佐 どうもありがとうございました。今日は本当に時間が全然足りなかったですね。お一人ずつ、もっと時間を取ってお話を聞いてディスカッションできれば良かったと感じました。

時間が参りましたので、最後に簡単にまとめに入りたいと思います。すでに佐藤先生がまとめてくださったので、繰り返しになるとは思いますが、今日のテーマ「有機農業・提携と食のローカライゼーション」にありますように、「食」という観点から「地域」へとつながっていくという展開が、今日の4人の方のお話に共通していたように思います。それは、食が、人間の生活の基盤である、あるいは、田邊さんの話に基づく、子育てをはじめとした生存の基盤であるということが大きいわけです。そういう特徴を持ったものであるから、どうしても生活を超えて社会・地域の問題につながっていかないとはいけません。そこはある意味、個人の問題ではなくて、人と人の関係、社会の広がりの中で考えていかないとはいけないということが、今日の共通点の1つではないかと思います。

それから2つ目は、今日、佐藤先生と丸井先生からローカルフードとスロー運動の話がされました。そうした欧米の経験を踏まえると、先ほど佐藤先生がおっしゃられたように、社会関係を埋め込んでいくことが必要ではないかということです。単に顔の見える関係だけではなくて、社会のあり方、経済のあり方、あるいは環境のあり方、そうしたものを埋め込んでいく必要がある。そのためには、やっぱりそれに共感する仲間をつくっていく必要があるのではないかという点が、今日の大きな成果ではなかったかと思っています。

その意味で、引き続き、今日のシンポジウムの成果をぜひ皆さんのところでも日々の生活でいろいろ選択・投票しながら社会を変えていかれることを期待して、今日は終わりにしたいと思います。

最後に、先ほどもご紹介されましたが、11月26日にJAえひめ中央の「太陽市」で、ファーマーズマーケットが開催されますので、松山に行かれる方はぜひそちらにご参加ください。それから、来月12月17日には、サンピアシリーズで「高知オーガニックフェスタ」が開かれますので、こちらの方もぜひご参加ください。

あわせて、谷川さんのほうから一言。

○会場参加者（谷川） 偶然、田邊さんからお話があったSDGsですが、かなりこみ入ったワークショップになると思いますが、実際に「じゃあ、SDGsという国連目標をどういう風に地域に活かしていこうか」というワークショップをやります。チラシを置いておりますので、良かったらお持ちいただいて、できればお申し込みください。以上です。ありがとうございます。

○岩佐 それでは、長時間にわたり、どうもありがとうございました。最後にパネリストの先生方に対して拍手をお願いしたいと思います（拍手）。

最後に、閉会にあたりまして、高知人文社会科学会会長の吉尾寛高知大学人文社会科学部長より挨拶をお願いいたします。

○吉尾 皆さん、どうもお疲れさまでございました。ありがとうございました。人文社会科学会のシンポジウムも、回をだいぶ重ねてまいりました。今日は、岩佐先生ですけれども、毎年、私たちの若い教員の方々がいろいろと準備をして、そして毎回毎回、形になってきます。反響、それから成果も出てくると思います。これからもこの会を続けていきたいとは思っているわけですが、私はこれでこの会の会長はちょっと退くことになります。

今日の内容のことで、どこかで言おうと思っていたことを、一つだけお許しいただきたいと思います。2～3年前に、今日はちょっとお見えになっていないのですが、農業経済学をやっておられる先生方が中心になって、いわゆる土地所有のテーマの科研に参加させていただきました。今、高知県でも高齢化のお話をされましたけれども、いわゆる無主の土地というのでしょうか、そうしたものがちょっと増えているというのです。実は、アジア・レベルで見るとどうなるかという研究を行いました。そこには、もちろん

高知も出てきました。フィリピン、韓国、台湾、中国。私は中国と台湾を担当しました。

その中で、グローバルゼーションの中で土地所有が風化していくような動きは確かにありますが、しかし実質的にその土地を維持している地域もたくさんあることが分かりました。日本のような形態が、他のところにそのまま適用するかというと、そうではなくて、例えば、中国や韓国では、家族が土地を維持しています。中国は、社会主義から改革開放に転換していきますが、その後、いろいろな取り組みはされているものの、結局は家族がそうしたものを一生懸命守っていくという姿をとっていて、必ずしも無主が増えていくわけではないようです。

また、家族だけではないです。今日、お話された丸井先生も言われたように、例えば生活場、そこで生きている人たち自らが守っていくといった地縁的なものももちろんあると思います。やはり、そういうようなものが、今回のお話の中でどのように展開していくのかということを感じた次第でございます。

あと、最近、台湾の台北に学生を連れて行った時に、台湾では「夜市」が有名ですが、実は朝市も結構ありました。台北にも結構朝市があって、それこそ、「アメリカにひろめ市場」というのと同じように、「台北に日曜市」というのがあるわけです。中国にも市はありますが、ほとんどが安い／高い、あるいは品物がいいかどうかにかかわらず、終始するわけですが、台北の朝市は、そこでいろんな話をしていました。お坊さんがいたりもしました。それから、台北の中部のあたりは生肉を切って売るといのがあって、そのあたりの風景はちょっと違うところだと思いますが、そのような中で、どうも商品の話をしているわけではないような結びつきがあるわけです。

あと一言付け加えますと、何で私がそこに行くようになったのかということ、実は古いお寺があるんですね。そこには、人々の信仰の世界みたいなものがあるわけです。そういう前提があって、そして人が集まっている。そこにモノが売られていて、日常的なさまざまな会話が成り立つ。そういう場が、同時に今日の話から見えてきたようなことも思った次第でございます。

長くなりましたが、この会は、今後形は変わっていくかもしれませんが、地域／高知に関わるテーマを、より幅広く議論していきたいと思っています。ご支援のほど、よろしく願いいたします。どうもありがとうございました（拍手）。

○岩佐 それでは、今日のシンポジウムを閉会させていただきます。皆さん、長時間どうもありがとうございました。

